月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.109

アルフィンとクロチルダの
衣装替えが登場！
『英雄伝説 暁の軌跡』

ジェニス王立学園を救うため
《支える籠手》が立ち上がる！
英雄伝説
空の軌跡SC
～絆の在り処～



『軌跡』シリーズ始まりの
物語を振り返る
英雄伝説 空の軌跡
ファルコムニュース

怪人ダルク・ファクト現る!?
も～っと集まれ！
ファルコム学園

リィンほか新VII組メンバーのビジュアルが到着！

英雄伝説 創の軌跡



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

リィン・シュバルツァー



《灰色の騎士》としてその名を知られるトールズ第Ⅱ分校特務科《Ⅶ組》の担当教官。
八葉一刀流《七の型》奥伝にして、帝国北部の温泉郷ユミルを治めるシュバルツァー男爵家・長男でもある。
帝国全土を襲った災厄《巨イナル黄昏》では一時、自我を喪失する程の窮地に立たされたが新旧《Ⅶ組》や多くの協力者、そして相棒である騎神《ヴァリマール》とともに帝国を忌まわしき"呪い"から解き放った。
大戦終結後は教官として職場に復帰。
《Ⅶ組》の教え子たちと切磋琢磨する日々を送る中、ある人物の依頼で故郷・温泉郷ユミルを訪れることになるが……。





ユウナ・クロフォード



特務科《Ⅶ組》のリーダー的存在で、クロスベル出身の正義感溢れる活発な娘。
帝国を襲った災厄では持ち前の前向きさで周囲を鼓舞しリィン救出のために行動を起こすなど《新旧Ⅶ組》の重心として大きな活躍を見せた。
大戦後、故郷・クロスベルにおける解放作戦では一時的に帝国を離れ《特務支援課》に協力。彼女にとっての悲願だった再独立への道をつかみ取った。
その後、警察学校に復学するという選択肢もあったが、クロスベルと帝国の今後の関係を見据えたユウナは自らの意志で第Ⅱ分校・特務科《Ⅶ組》に残ることに。







リィンと新Ⅶ組メンバーのイラストが到着！

2020年夏に発売される『軌跡』シリーズ最新作『創の軌跡』。前号ではロイド・バニングスほか、クロスベル警察特務支援課メンバーのイラストが公開されたが、今回はリィン・シュバルツァーと、トールズ士官学院・第Ⅱ分校の新Ⅶ組メンバーのイラストが到着した！

『英雄伝説 創の軌跡』公式ホームページ
https://www.falcom.co.jp/hajimari/

タイトル：英雄伝説 創の軌跡　**発売日**：2020年夏予定　**ジャンル**：ストーリーRPG
対応機種：PlayStation®4　**プレイ人数**：1人　**小売価格**：未定　**CERO レーティング**：審査予定

※画面は開発中のものです。

クルト・ヴァンダール

天才的な双剣術の腕前を持つ、容姿端麗なヴァンダール家の次男。
一族が皇族守護職の任を解かれてからは進むべき道を見出せないでいたが、リィンや《Ⅶ組》の仲間との交流を経て、素直な心で成長を遂げていった。
災厄《巨イナル黄昏》では、かつての護衛対象であったセドリック皇太子と敵対。互いの想いをぶつけることで、人として、友として、そして、ライバルとして改めて向き合っていくことを決意した。
その後、《Ⅶ組》に残り卒業まで文武に励む選択をしたが、生真面目な性格が仇となってか、周りと比較して自身の成長に限界を感じ始めているらしい。





アルティナ・オライオン

地精（グノーム）によって生み出された人造人間（ホムンクルス）で、情報局のエージェントとして第Ⅱ分校に入学していた少女。
当初は感情が希薄だったが、《Ⅶ組》での活動や同級生と過ごす中で年齢相応の感情を表すようになり、邪険に扱っていたミリアムとも、次第に姉妹のような関係を築いていった。
大戦後、エレボニア帝国の軍備縮小に伴うTMP（鉄道憲兵隊）や情報局の再編をきっかけに、エージェントとしてではなく、第Ⅱ分校の生徒として日々を重ねる道を選択。
そんな中――アルティナはある想いを胸にリィンの故郷・ユミルに同行することになる。






ミュゼ・イーグレット

清楚かつ蠱惑的な言動で周囲を惑わせる少女で、四大名門の筆頭・次期カイエン公爵としての運命を背負う。
第Ⅱ分校では、無数の事象から未来を見通す“指し手”としての力を利用し、来たる大戦に向けて水面下で魔女ヴィータ・クロチルダと接触。
災厄《巨イナル黄昏》では《ヴァイスラント決起軍》主宰として帝国政府と対立し、世界に犠牲を強いることを知りながらも自らの命を捨てる覚悟で立ち向かっていった。
大戦後は再び《Ⅶ組》の生徒として学業を続けることに。カイエン公として表舞台に立つまでに残された、わずかな期間を一人の少女・ミュゼとして精一杯楽しもうとしている。





アッシュ・カーバイド

粗野で猛々しい振る舞いを見せるが、あらゆる分野で並外れた才能を発揮する不良青年。
幼い頃に起こったある悲劇がきっかけで帝国の“呪い”をその左眼に宿すようになり、第Ⅱ分校在籍時に皇帝銃撃という大罪を犯してしまう。
災厄《巨イナル黄昏》では《Ⅶ組》の激励を受け、最後まで“呪い”に抗うことを決意。自らが犯した大罪の落とし前をつけるべく、リィンや仲間たちとともに大戦を戦い抜いた。
その後、“呪い”から解き放たれたアッシュは第Ⅱ分校へ復学。《Ⅶ組》で学びつつも、自分が進むべき道について迷いが生じているようだが……。






KEYWORD

エレボニア帝国

ゼムリア大陸西部に位置する、《黄金の軍馬》を紋章に掲げる旧き大国。
帝国全土を覆った災厄《巨イナル黄昏》の影響により周辺諸国を巻き込んだ世界大戦という事態が引き起こされてしまったが、《ヴァイスラント決起軍》や生還したオリヴァルト皇子率いる《光まとう翼》、そしてリィン・シュバルツァーを中心とした《新旧Ⅶ組》が帝国の忌まわしき“呪い”を解き放ち、大戦を終結へと導いた。
停戦後、皇帝ユーゲントⅢ世の復帰が発表され、クロスベルや共和国方面に展開していた帝国軍の即時撤退が決定。
鉄血宰相ギリアス・オズボーンに代わりレーグニッツ帝都知事が帝国政府の暫定首班となり、皇族や四大名門とともに国民や諸外国の信用を取り戻すべく尽力していくこととなった。



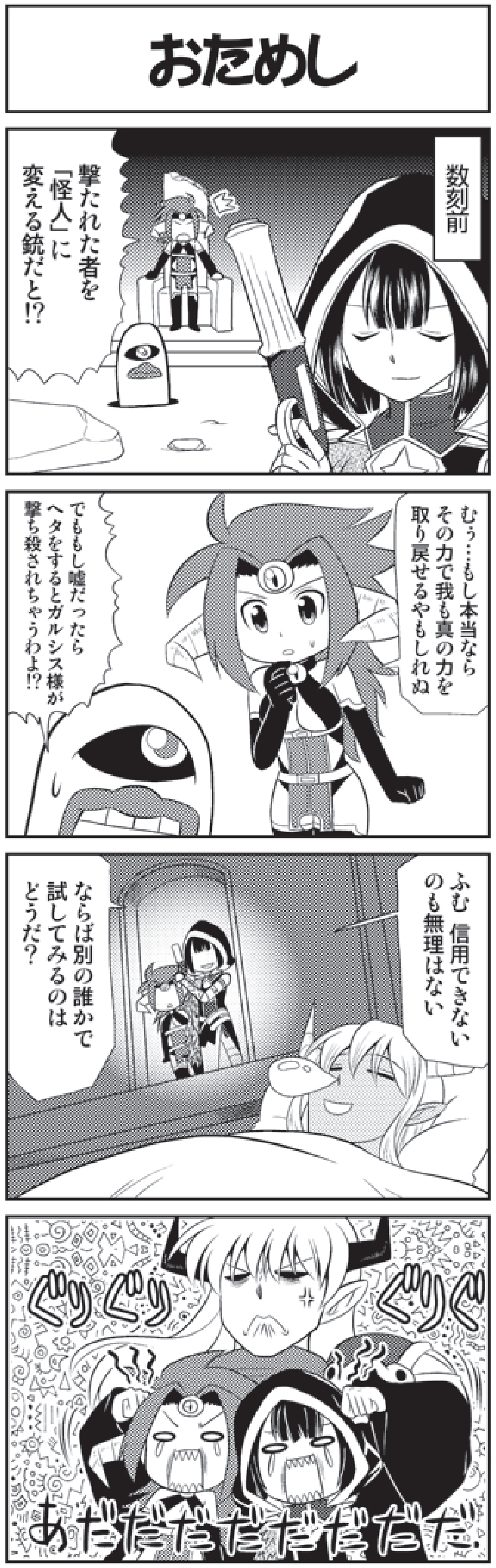
トールズ士官学院



帝国中興の祖「ドライケルス大帝」によって設立された、200 年以上の歴史を持つ伝統ある士官学校。
七耀暦 1206 年に新設された第Ⅱ分校は当初、帝国政府の意に沿わない教官や生徒たちを集めた訳アリ学校という立場だったが、大戦前後に第Ⅱ分校が目覚ましい活躍を見せたことでその存在意義が見出され、分校として正式に存続することが決定した。
一方で、帝国正規軍の軍備縮小に伴って帝国内に配備されている「機甲兵」の兵器としての脅威が改めて取り上げられることとなり、士官学院に導入されている「機甲兵教練」の授業も、その必要性について見直す動きが出始めている。

★ファル学、還ってきたよ～★


ーーふと気がつくと私の体は異形の姿と化していた
まぁ元々魔物なので今更といえば今更なわけだが…
も〜っと集まれ!
FALCOM
ファルコム学園
新久保だいすけ
フフ…どうやらうまくいったようだ
「怪人」になった気分はどうだダルク・ファクトよ
か 怪人だと…?お前は何者だッ
我が名はアプリリス…「怪人」達を統べる闇の大首領なり!
ギャキィ
新たな怪人よ我が配下として相応しい名を与えようぞ
その姿…そうだなーさしずめ「黒の王(触ったらアカンやつ)」といったところか
読み方!!


おためし
数刻前
撃たれた者を「怪人」に変える銃だと!?
むぅ…もし本当ならその力で我も真の力を取り戻せるやもしれぬ
でももし嘘だったらヘタをするとガルシス様が撃ち殺されちゃうわよ!?
ふむ 信用できないのも無理はない
ならば別の誰かで試してみるのはどうだ?
ぐりぐり
ぐりぐ
あだだだだだだだだ


伝承と風評被害
そ その姿はジーク・ファクト!?
誰だそれ
PCエンジン版イースⅣにのみ登場する人物よ
七百年前のセルセタを滅亡させイースも滅ぼし後にダルク・ファクトと名乗ったとか
おぅ
何そのご長寿テロリスト…
事実に尾ヒレがついて伝わるのはよくあることですからね…
こわいゎー
無敵伝説オルテガ
どっ
逆に実物よりマイルドにされてるシスターが主役の小説とかあるけどな!
このあとめちゃくちゃ入院した

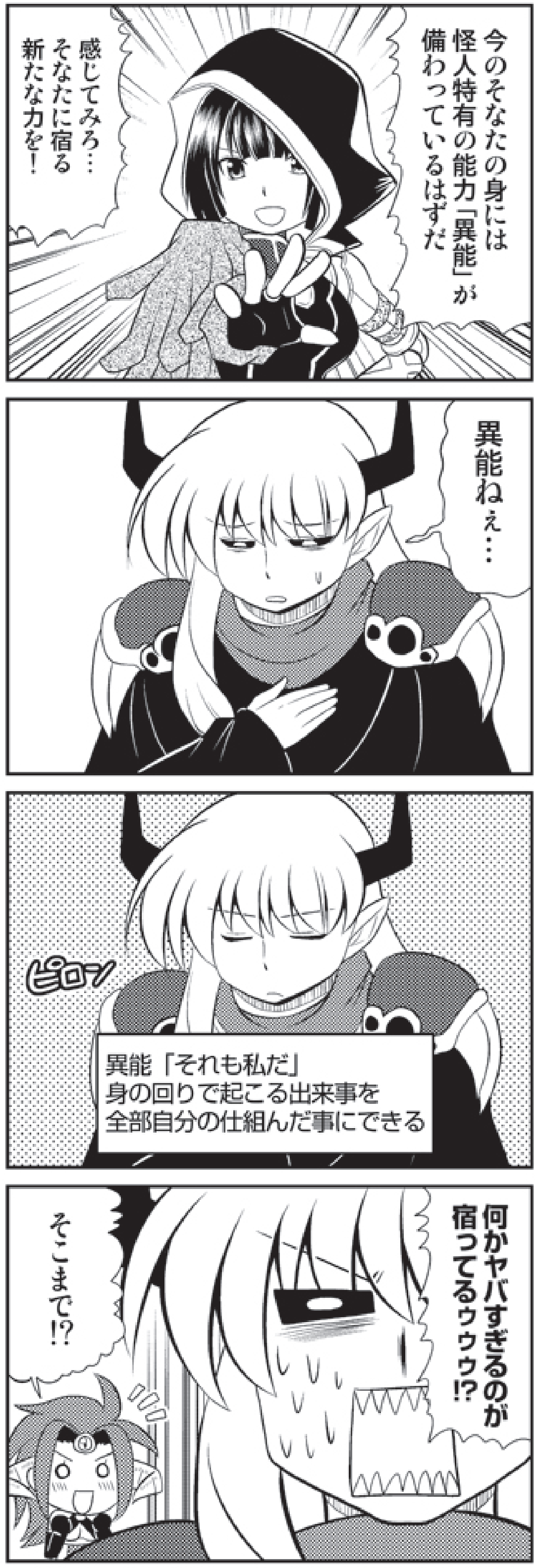
未知の美少女



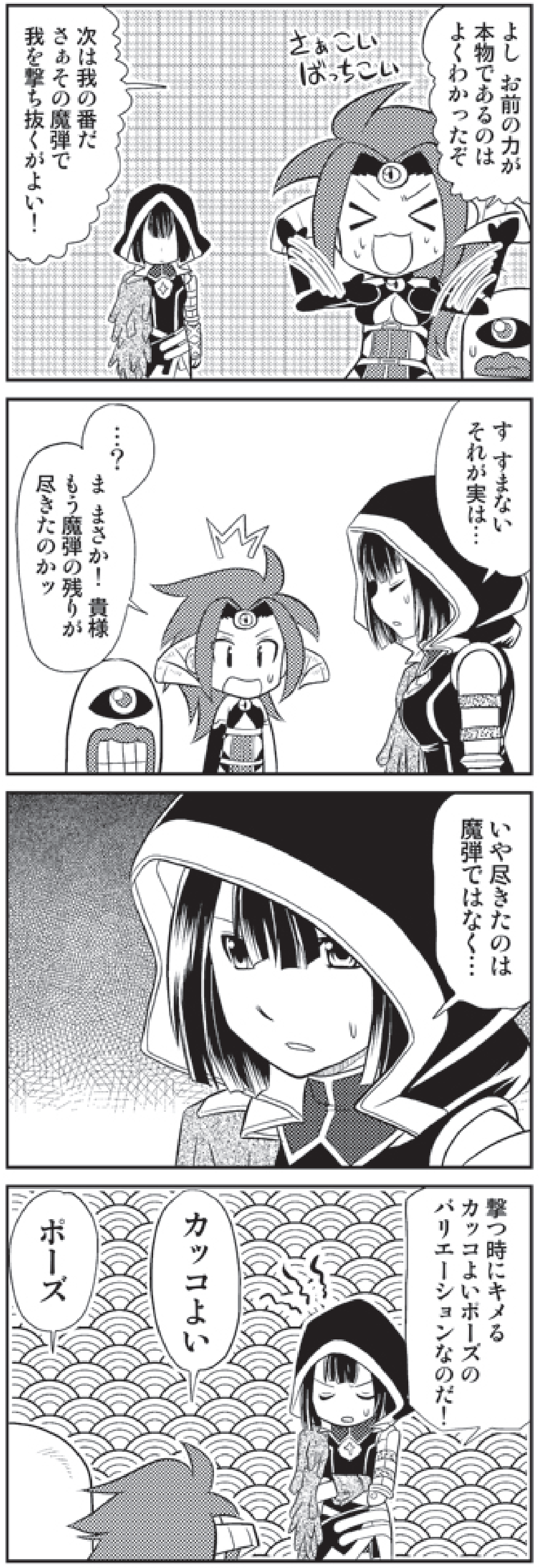
泣き出す角度



異能



尽きたもの



運命の一発



カッコイイ撃ち方



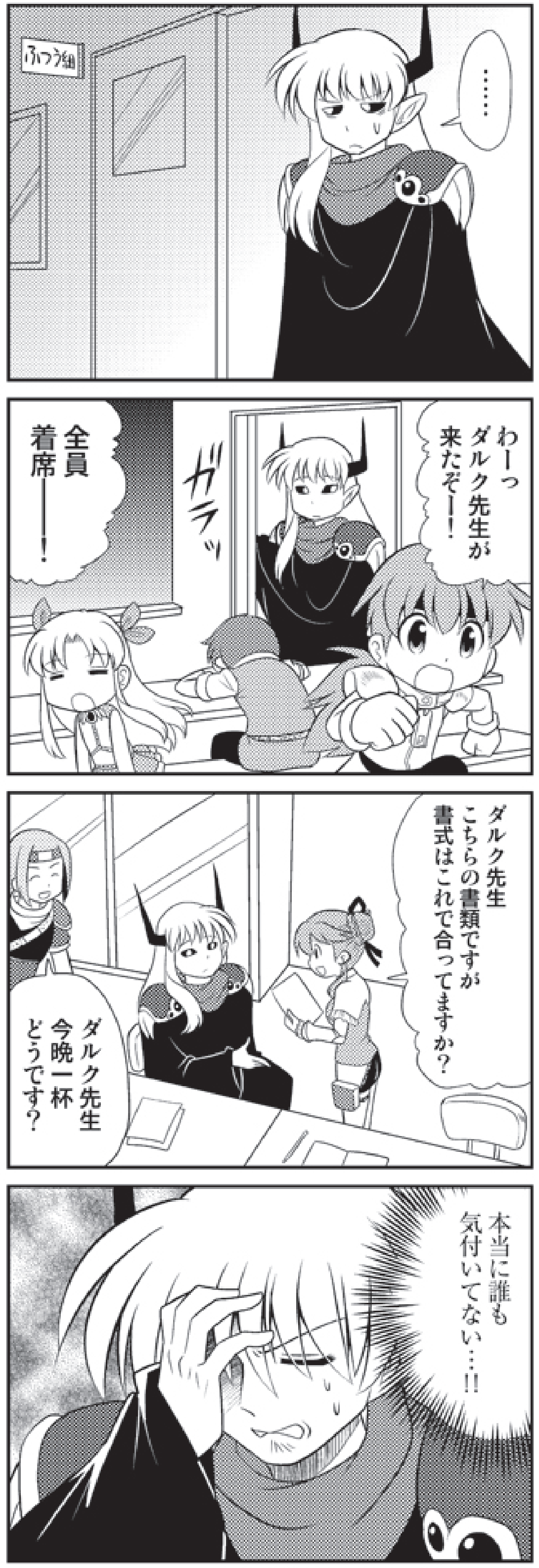
孤高とぼっち



パワードアプリリス



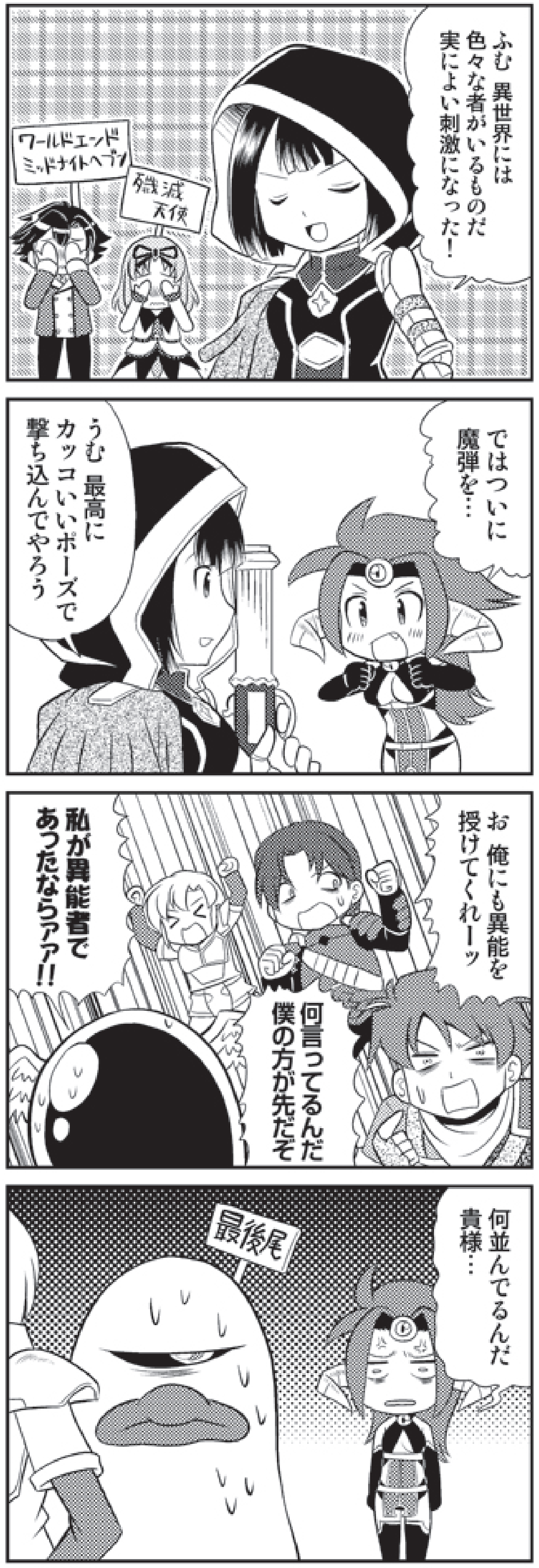
魔物と怪人



PCE版スタッフロール



野望のケマゾツ



その姿を我が物に



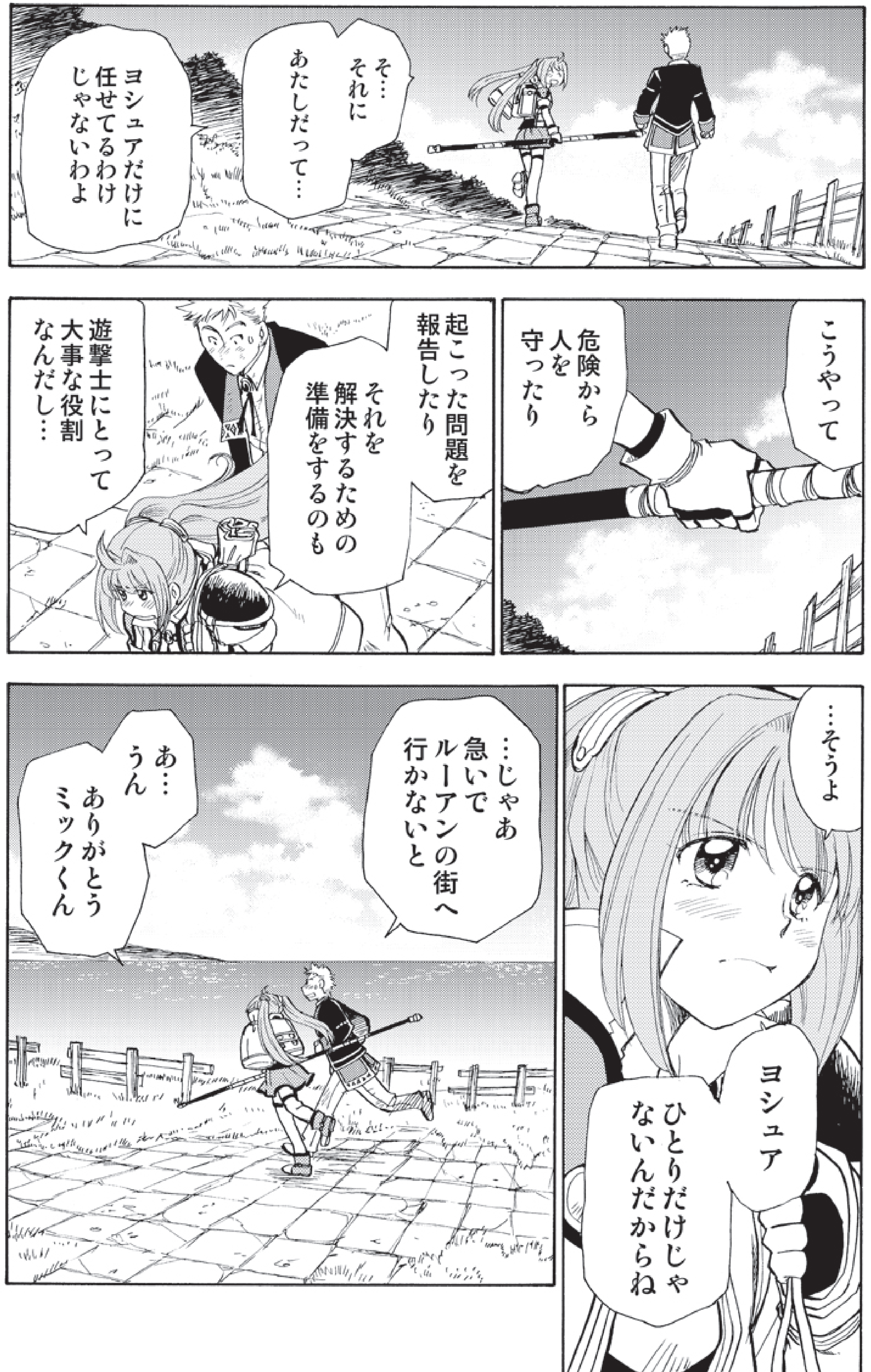


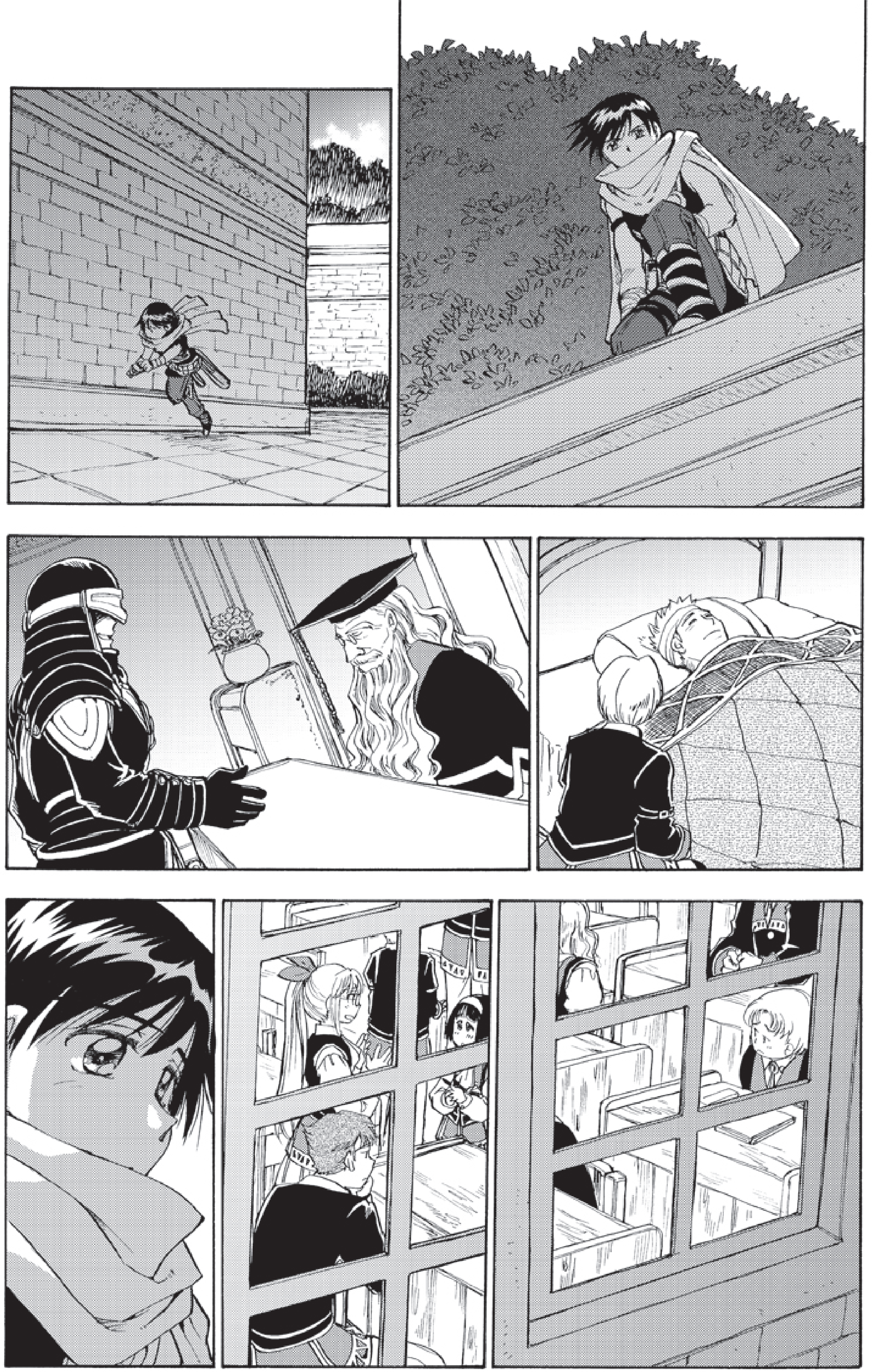
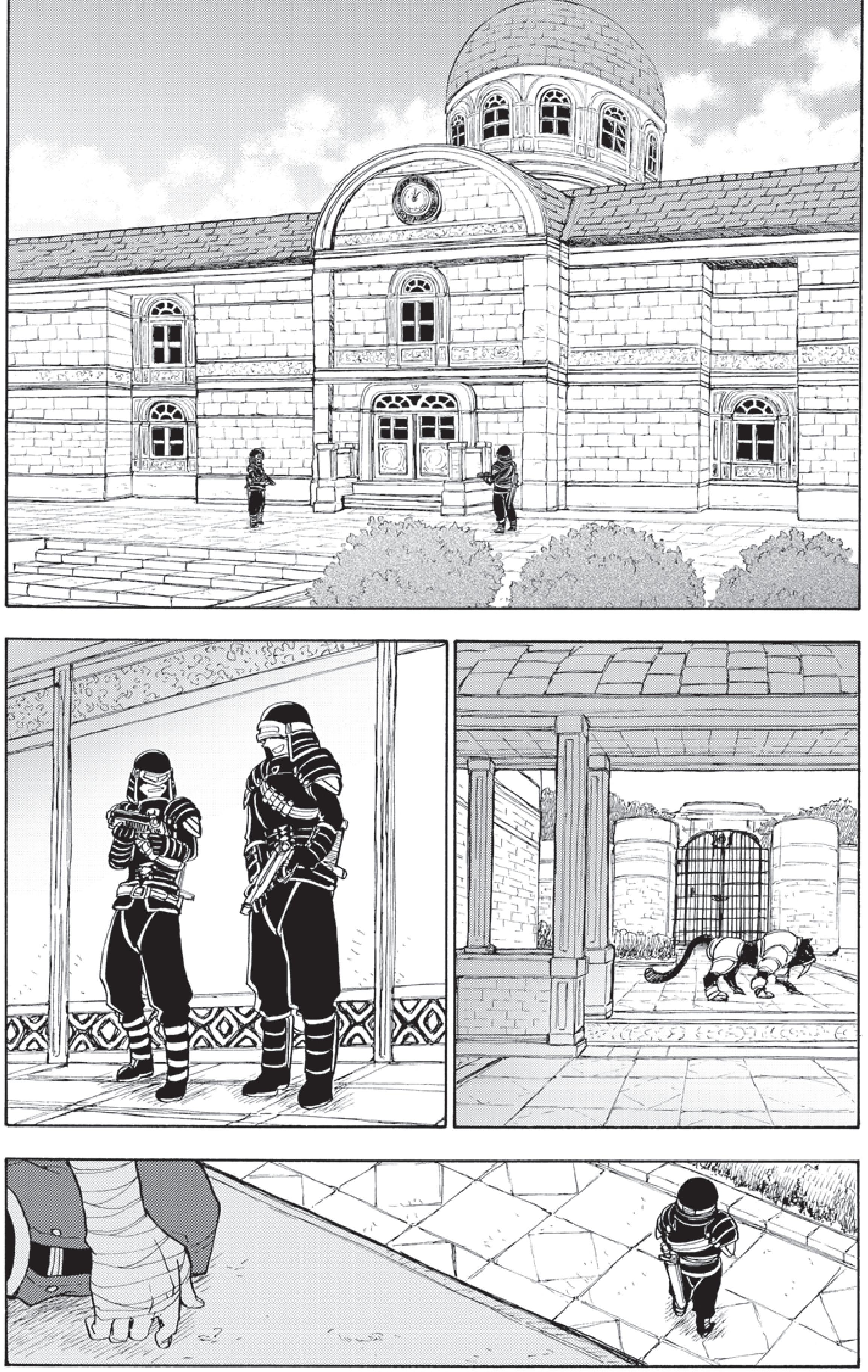
英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円＋税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！



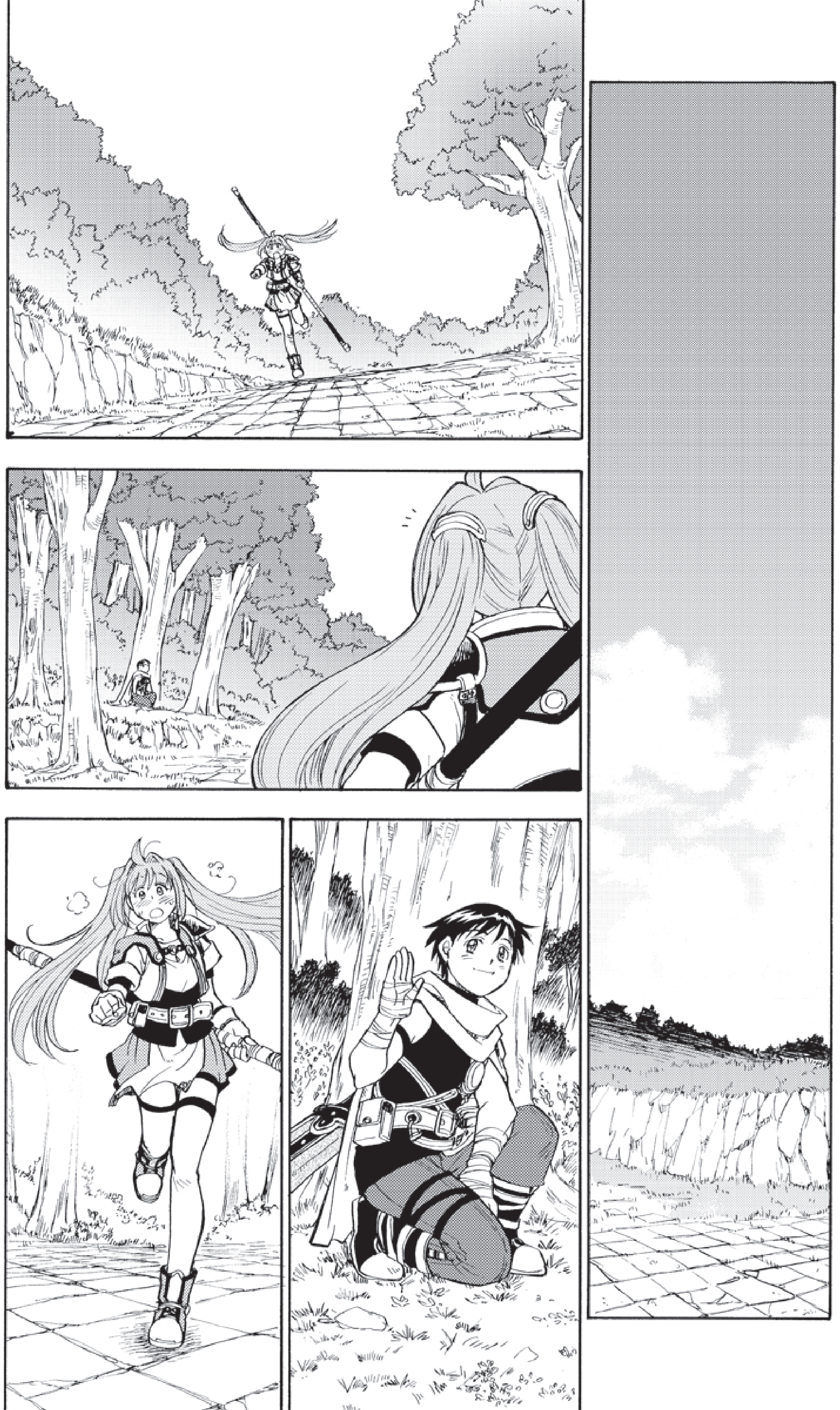
異世界《ザナドゥ》に
勇者よ再び！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園
① 著者：新久保だいすけ
定価：本体900円＋税
学園生活を満喫していたが、全員が元の世界に戻っていった英雄・戦士達。しかし、再び彼らは伝説の桃源郷《ザナドゥ》へと帰ってきた！　果たしてその理由とは!?
奇才・新久保だいすけが贈る、お待ちかねのシーズンⅡ、リスタート！
ISBN:978-4-8021-3138-4
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©DAISUKE ARAKUBO
©2019 FIELD-Y


ごめんね ミックくん
ルーアンの協会まで一緒に来てくれる?
それは…いいけど…
…なあ
本当にヨシュアだけに任せて
大丈夫なのか…?
空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
へーき へーき
ミックくんにはお姫様な印象しかないかもしれないけど
ヨシュアはほんとはとっても強い男の子なのよ!
悪い奴らなんかひとりでだってけちょんけちょんにのしちゃえるくらい
すっごい実力の持ち主なんだから!


そ…それにあたしだって…
ヨシュアだけに任せてるわけじゃないわよ
こうやって
危険から人を守ったり
起こった問題を報告したり
それを解決するための準備をするのも
遊撃士にとって大事な役割なんだし…
…そうよ
ヨシュアひとりだけじゃないんだからね
…じゃあ急いでルーアンの街へ行かないと
あ…うん
ありがとうミックくん


敵は結社が使ってる強化猟兵か
陽動作戦が使えれば制圧はそこまで難しいミッションではなさそうだけど
この事態に短時間じゃさすがに援軍は望めないだろうな…
…無理をすれば
僕ひとりでも…
……




ヨシュア おまたせ! 学園はどうだった!?
大丈夫 今のところ目立った動きはないよ
各部屋に監禁されてはいるけど学園の人たちはみんな無事でいる
撃たれた用務員の人も致命傷じゃなさそうだ
ルーアンで協会に報告はしてきたわ
ジャンさんが王国軍にも連絡してくれたけどすぐには応援に来れないみたい
だろうね
だから学園へは
だけどね!


その代わり
すっごい援軍が来てくれたわよ!
み…みなさんどうして…
ちょうどボースからルーアンに向かってる途中だったんだよ
結社が王立学園に現れたんだってね
我々にも協力できることはあるだろうか?
これなら学園のみんなを助けられるわ!
ね
ヨシュア!


うん
目的はわかりませんが
結社の兵士たちは学園を占拠し生徒と職員を監禁しています
それなりの人数がいるのと
この状況下でも使用できる導力銃などを装備しています
結社側も「導力場発生器」と同じような技術を持っているとみて間違いないと思います
確か王都でゴスペルを使って導力停止現象を無効にする実験をしていたわね
でも学園にいるのは下位の兵士のみで結社の幹部は不在のようです
彼らが次の行動に出る前に
こちらから一気に打って出れば
この戦力で十分制圧は可能です


ならば我々が正面から攻め込んで兵士を誘い出すというのはどうだろう
その隙に学園内部に詳しいエステル君とヨシュア君が
裏手から突入して人質を解放していくという形になるが
それでいいと思います
ふふ
なんだかエルベ離宮の人質解放作戦を思い出すね
ヨシュアくんも戻ってきたし
あの時と同じだよ
なんかもう
成功する気しか起きないよね!
うん!
では
作戦をはじめよう!
次回に続く


FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
もうひとつの
『空の軌跡』が始まる――
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！　©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


英雄伝説
空の軌跡SC
ソラノキセキSC
～絆の在り処～
4
結社《身喰らう蛇》に囚われたエステル。脱出を試みたエステルだったが、《グロリアス》の強固な守りの前に再びピンチに陥る。そこに現れたのは、これまで行方をくらましていたヨシュアであった……。運命に導かれたふたりが再び巡り会う、誰もが待ち焦がれた瞬間を描く第４巻！
やっとあたしは、ヨシュアに届くことができた。
著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム
定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3156-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©KITSUTSUKI SHINKI　©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『VALKYRIE ANATOMIA -THE ORIGIN-（ヴァルキリーアナトミア-ジ・オリジン-）』にて、『英雄伝説 空の軌跡SC』コラボ開催！



株式会社スクウェア・エニックスで好評配信中のスマートフォン向けファンタジーRPG『VALKYRIE ANATOMIA -THE ORIGIN-（ヴァルキリーアナトミア -ジ・オリジン-）』と、日本ファルコムの大人気ストーリーRPG『英雄伝説 空の軌跡SC』とのコラボレーションイベントが3月2日月）より開催されることが決定！
コラボでは、『英雄伝説 空の軌跡SC』より「エステル」CV：神田朱未）、「ヨシュア」CV：斎賀みつき）がアナトミアの世界に期間限定で登場。また、コラボ開催期間中、コラボイベントのシナリオパートや戦闘シーンなどにおいて、BGMが期間限定で『英雄伝説 空の軌跡』の楽曲となっています。



■コラボ開始後に最大で合計 5000 秘石や「ヨシュア」がもらえる新規プレイヤーキャンペーンを受付！

また、コラボ開催に先立って、2 月 25 日火）より「新規プレイヤー受付期間」がスタート。受付期間中に『ヴァルキリーアナトミア』をはじめていただいたプレイヤーは、「『空の軌跡SC』コラボ記念　初心者限定ログインボーナス」にて、ログイン 1 日目でゲストプレイアブルキャラクターの「ヨシュア」を手に入れることができます。

『空の軌跡SC』コラボ記念 初心者限定ログインボーナス新規開始受付期間
開始日時:2020年2月25日火)4:00
終了日時:2020年3月9日月)3:59
※新規開始受付期間とログインボーナス期間は異なりますのでご注意ください。

■「新規ユーザー応援特別ログインボーナス」リニューアル！

2 月 25 日火）15:00 予定のデータ更新後より新しくゲームをはじめていただいたプレイヤーに向け、より一層ゲームを楽しんでいただけるよう、「新規ユーザー応援特別ログインボーナス」の内容がリニューアルされます。詳しくはゲーム内のお知らせをご確認ください。

■ VALKYRIE ANATOMIA -THE ORIGIN-（ヴァルキリーアナトミア - ジ・オリジン -）」とは

400 万ダウンロードを達成しているスマートフォン向けファンタジー RPG。「VALKYRIE PROFILE ヴァルキリープロファイル）」シリーズは、1999 年の第 1 作発売以来、北欧神話をモチーフとした独特の世界観をベースに展開する人間の死と神々の存在を描く重厚なストーリーに加え、独自のバトルシステムで高い評価を得ているロールプレイングゲームです。

■ジャンル:ファンタジーRPG
■対応OS:iOS／Android
■料金体系:アイテム課金制基本プレイ無料）
■開発:ドキドキグルーヴワークス／セブンスコード
■公式サイト:http://www.valkyrieanatomia.com/

■ App Store URL：
https://itunes.apple.com/jp/app/valkyrie＊anatomia/id1082568835?l=ja&ls=1&mt=8

■ Google Play URL:
https://play.google.com/store/apps/details?id=com.square_enix.android_googleplay.valkyriejp

好きな文字を入力してオリジナルスタンプが作成できる！

LINEスタンプ vol.28『ゆるみっしぃ 7』配信開始！

日本ファルコムのマスコットキャラクター「ゆるみっしぃ」を題材としたシリーズ初のカスタムスタンプの販売がスタート！
5文字までのお好きな文字を入力して、オリジナルスタンプとしてご利用いただけます。（ご購入後、何度でも文字入力が可能です）

《文字入力例》





■『ファルコム LINE スタンプ』シリーズ紹介ページ
https://www.falcom.co.jp/mobile/linestamp.html

2019年の高評価タイトルがお買い得！

PSストア『Critic’s Choiceセール』2020年3月3日(火)まで開催中！



PlayStation Storeにおいて、2019年に評価の高かった作品を対象とした『Critic’s Choiceセール』が開催中！「イースⅨ -Monstrum NOX-」も25%OFFとなっているので、ぜひこの機会にイース最新作をお楽しみください！



■セール期間
2020年2月19日(水)～2020年3月3日(火)まで

イースⅨのキャラクターたちがキュートなグラフアートになってFalcom Baseに登場♪



3月7日（土）より「イースⅨ」グラフアートのサコッシュが新発売。外出時にも便利なアイテムなので、この機会をお見逃しなく！

【取り扱い店舗】
GraffArt Shop 池袋本店、なんば店、名古屋店内 Falcom Base にて販売

同日10時より通販でもご予約受付開始
http://kyaragoods.shop-pro.jp/

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。２月はメインストーリーの最新章が更新されたほか、アルフィンとクロチルダの華やかな衣装替えバージョンが実装！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

メインストーリー第７章第４弾 「北の孤島／後篇」が実装！

《戦争卿》の拠点捜索のため絶海の孤島に降り立った試験班は地下に棲む住人たちとの交流を図る。
エイヤの少女・ロマに地下世界を案内される中で次第にエイヤの民が辿ってきた“エイヤの歴史”とその“掟”を知ることとなる――。



2月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



お雛様・アルフィン

“帝国の至宝”ことアルフィン皇女が雛祭りに先駆け和装束に！　金髪碧眼の出で立ちと衣装とのギャップがGOOD！

パーティー・クロチルダ

大胆なパーティードレスを身にまとったクロチルダ。どことなく東方風の意匠がこらされたドレスはなんともエキゾチックだ。

3月の新規衣装替えキャラクターは？

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

昇り切った先は小さな部屋のようになっていて、壁の一面が四角く切り取られて屋上へと続いていた。
「わっ。まぶし……」
エステルの目に最初に飛び込んできたのは、太陽が西へと傾いた青い空だ。
空の反対側、東の下のほうだけ、少し青色が濃い。あそこに、これからやってくる夜がいる。
どうやら間に合ったらしい。
高い空の下、エステルは思い切り深呼吸をした。
古い遺跡につきものの淀んだ空気が身体から掃（はら）われてゆく感じがする。
風がうなじを撫でて髪を揺らした。
気持ちいい。
「ほお、こりゃ驚いた。予想以上にいい画が撮れそうだな」
「センパイ。でっかいお釜がありますよぅ！」

英雄伝説 空の軌跡1 ～消えた飛行客船～

第2回

『創の軌跡』の発売を記念して
『軌跡』シリーズの原点を振り返る！



リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズ。2020年夏に発売が予定されているシリーズ最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、今号より、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』のノベライズをお届けしていく。

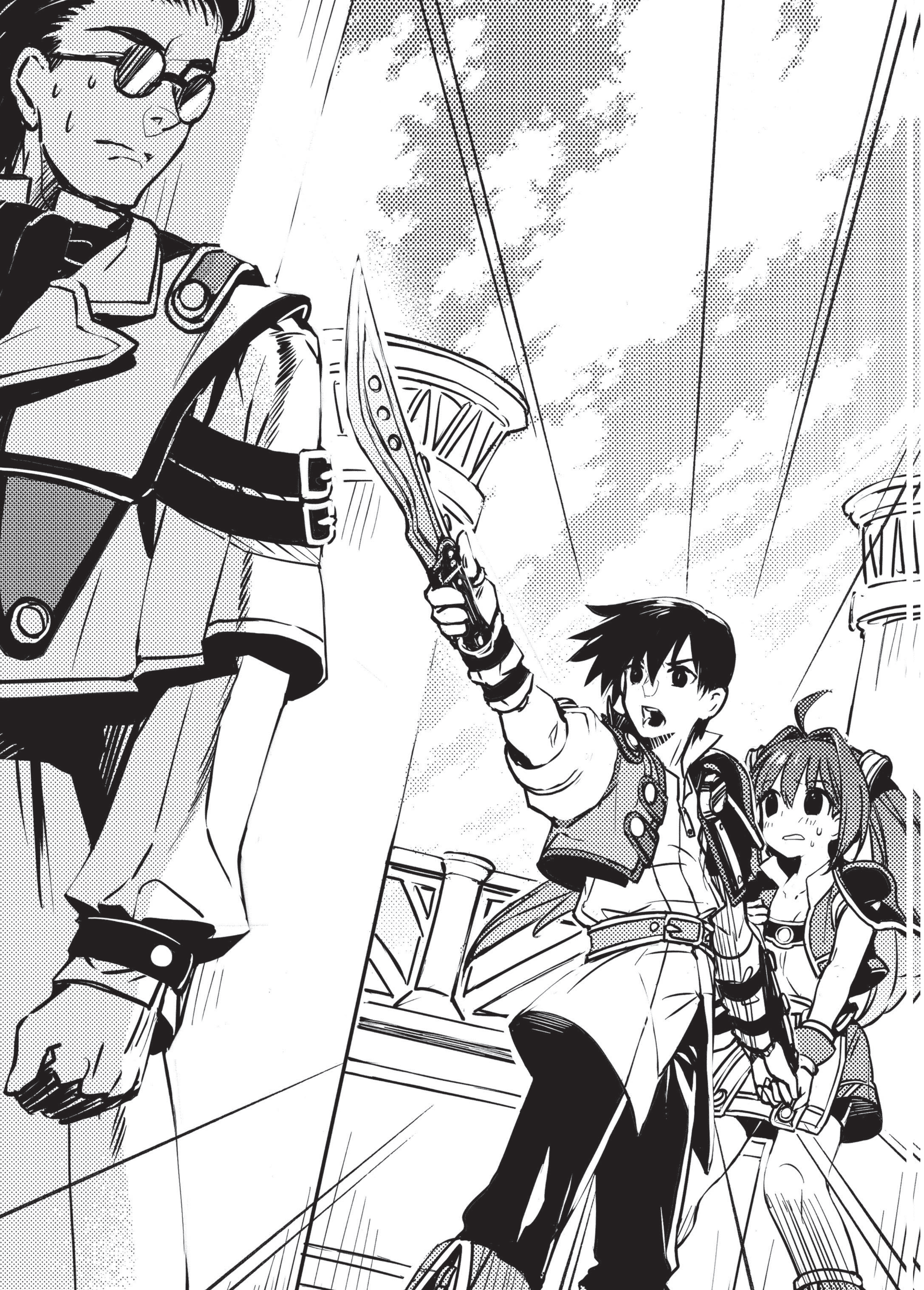
製品情報
好評発売中
著　　　：はせがわみやび
イラスト：ワダアルコ
定　　価：1,200円（税別）

「おう。あれが例のブツか……」
ナイアルとドロシーが正面を睨みつけながら言った。
「あれは……？」
エステルたちは塔の端のほうから上へと出たのだけれど、円形に広がる屋上の、ちょうど反対側に、大きな平底のお皿みたいな——ドロシー風に言えばでっかいお釜みたいな——機械装置が据え付けられていた。
お皿の差し渡しは三アージュほどもありそうで、しかも、左右に立ち並ぶ円柱の間を歩いていかねば辿りつけない。
ちょっとした祭壇のようにも思えた。
「祭壇か。なるほど、そんなふうにも見えるか……。あいつはな。資料によると、どうやら古代文明の残した何かの装置らしいぜ」
ナイアルが言った。
「何か、って、何？」
「さあな。使用目的はわかっていないらしい」
「それじゃ、なにもわかってないのと同じじゃないの」
「だからネタになるんじゃねえか」
「ふーん。そんなもん？」

エステルたちはそんなことを言いながら、古代の装置に向かって歩いていった。
「ナイアル先輩！　これ、撮ってもいいですかぁ？」
「おう！　撮れ撮れ。じゃんじゃん撮りやがれ！　ああ、周りの景色も忘れるんじゃねえぞ！」
「わかってますよぅ！」
ポーチから取り出したオーバルカメラを手に嬉々とした顔になっているドロシーを、手のひらをひらひら振りながらナイアルが煽る。
「それにしても大きな装置ね。ねぇ、ヨシュアは、こんな物があるって知ってた？」
エステルはもっと近寄って見ようとして——ヨシュアに引き留められた。
「ヨシュア？」
かばうようにエステルの前へと出たヨシュアが、古代装置の向こう側へと声をかける。
「……隠れても無駄です」
「えっ……？」
「出てきたほうが身のためですよ？」
声が冷たい。
緊張しているのだ。エステルにはわかった。
握られた手を思わずぎゅっと握り返してしまう。
しかしいったい誰に、あるいは何に向かって言っているのか。エステルは戸惑い、警戒して

身を強張らせたところで、応えが返った。
それも、やや情けない声で。
「ひっ……。で、出て行きますから。今すぐ！」
装置の向こうで男が立ち上がった。どうやら腰をかがめて隠れていたらしい。
「なに、このヒト？」
エステルは拍子抜けしてしまう。
「ビックリ〜。誰かさんがいましたよぅ。ヨシュア君、よく気づいたねえ」
「先客がいたのかよ」
エステルたちが驚くのと対照的に、ヨシュアのほうは未だ言葉を発しない。
黙ったまま男を睨んでいる。
その迫力に押されたのか、男はやたらとぺこぺこと謝りだした。
「ごめんなさい！　い、命だけは助けてください。持ってるミラは差し出しますから〜」
「ちょ。ちょっとオジサン。何か勘違いしてない？」
エステルが慌ててヨシュアの前に出て弁解する。この男性はどうやらエステルたちを盗賊か何かと勘違いしているらしかった。確かに遺跡に盗賊は付き物だが。
「これを見ればわかるでしょ！」
エステルは遊撃士協会の紋章を見せた。

「おお。ひょっとして、君たちは遊撃士なのですか？」
「えへへ。その通りよ。あたしはエステル。こっちはヨシュアね」
「で、俺たちはリベール通信のもんだ。塔の取材に来てるんだが……」
「わたしはドロシーですよぅ！　で、こっちがポチ君です！」
オーバルカメラをずいっと前に出して言った。
「ぽち……？」
「はい！　ぽちっと押せば、ぱちっと素晴らしい写真を撮ってくれるとゆー」
男が戸惑った顔になった。
「おまえは黙ってろってーの。話がややこしくなる！」
「センパイおーぼー。後輩ギャクタイ、ハンターイ！」
「ああ、もう。話が進まねえだろうが！」
「まあまあ」
エステルは二人をなだめつつ、見知らぬ男を観察していた。
丸眼鏡をかけた目の細い男だった。歳はナイアルよりもだいぶ上に見える。四十代かもしれない。おどおどした声を出しているけれど、笑みを浮かべたような表情は崩さなかった。
旅人の着るような裾の長い白い外套を羽織っていた。
「いやこれは失礼しました。こんなところに来るなんて、なんて怪しい人たちだろうと」



「そういうあなたも、充分、怪しいと思いますけれど……」
「ヨ、ヨシュアってば！」
「おっと。これは失礼。申し遅れました。私、考古学者のアルバと言います」
「アルバ……さん？　学者なの？」
　エステルの問いに肯定の頷きを返してくる。
　言われてみれば、頭の良さそうな人だった。
　アルバと名乗った考古学者は、聞かれてもいないのに、ぺらぺらと塔へ来た理由を語りだした。曰く。古代文明の研究のためであるとか。
　たったひとりで塔を昇りきったと聞いて、エステルは呆れてしまう。
「よくここまで無事でしたねぇ」
「慣れてますからね。魔獣から逃げ回ることと、罠を外すことだけは得意なんです。とはいえ今回は死にそうな目に遭いましたけど。さすがは《四輪の塔》のひとつです」
「無茶苦茶ねぇ」
　目の前のアルバはどちらかといえば優男に分類されそうな人物で、とても魔獣の蠢く古代遺跡に単身乗り込むようなタイプには見えないのだ。
「たいした先生だぜ」
「いえ。実践する考古学者としてはふつうのことかと」

アルバが言った。
実践する考古学者……戦う法律学者とか、そんなようなものだろうか。なんとなく恐ろしげな響きがあるようなないような。
「ってことは、この塔の由来とかわかるかい？」
ナイアルの関心は、彼が学者だと聞いたとたんに遺跡のほうへと戻ったようだ。
「そうですねぇ。なにぶん、まだ調査を始めたばかりですから……」
「面白いネタがあれば記事にさせてもらうからよ」
「ふむ……」
アルバが少し考えこんでから言った。
「《輝く環（オーリ・オール）》……」
アルバが口にしたのは不思議な響きの言葉だった。
その単語を聞いたときのことを、エステルはそのあとずっと忘れなかった。
日差しは西に傾いていて。
空はゆっくりと藍色に染まりつつあった。
塔の上の風は強く、真上の雲は早足で過ぎてゆく。
風に躍る自分の髪を左手で抑えつつ、エステルは考古学者の放った単語の意味を捕まえようと、頭のなかを浚（さら）ったけれど。

どこにも見つからない。懐かしい気もするし、不吉な気もする。そんな言葉。
「それはなに？」
自分の問いかけが、まるで自分のものではないようで。
エステルは不安になった。

† † †

エステルの問いかけには答えず、アルバが話を進めた。
「では、《七の至宝（セプト＝テリオン）》という言葉を聞いたことは？」
今度はエステルにも答えられる。
「昔話に出てくるやつ？」
「ええ」
「だったら、七つの宝物のことよね？」
歴史に疎いエステルでさえ知っている。いや、それは歴史というよりも、おとぎ話に近いものだ。
なにしろ歴史の始まる前のことなのだから。
遥かな過去。エステルたちのような現代人が大陸を我が物顔で闊歩する前。古代人と呼ばれ

る人々がいた頃に、彼らが天から授かったという宝物のことだった。
「そう、《七の至宝（セプト＝テリオン）》のことです。古代人は、七つの至宝の力を借りて、海と大地と天空を支配したそうです。それどころか、生命や時間の神秘さえ解き明かしたとか」
だが、彼らの栄光は長くは続かなかった。
「古代文明は崩壊してしまい、《七の至宝（セプト＝テリオン）》は失われてしまった」
「七耀協会の聖典にも記されているな。で、それが塔とどう関係するんだ？」
「その七つの至宝のひとつが、このリベールに眠っている……としたら？」
とっておきの秘密を明かす口調でアルバが言った。
ナイアルが目を細める。
「ほう？」
「その宝の名が《輝く環（オーリ・オール）》」
「《輝く環（オーリ・オール）》……。不思議な響きの言葉ね」
「〝輝く環〟という意味だとか。その伝承を確かめている最中でして。リベール最古と言われるこの遺跡に何か手がかりがあるかもと睨みましてね」
「はー。ほー。へー。夢のあるお話ですねぇ」
ドロシーがひたすら感心していた。
「でしょう⁉　いやあ、わかってくれる人がいて嬉しいなあ！」

「それで……手がかりは見つかったんですか？」
ヨシュアが言って、アルバが頭を掻く。
「それが皆目なのですよ。この装置の謎が解明されれば、何かわかると思うんですけれどねぇ」
そう言いながら、エステルたちの前にある装置を指さした。
なるほど、そう繋がるわけだ。
「うーん。ちいっと弱いなぁ。面白い話だとは思うが、聞いているとさっきから『らしい』とか『かも』とかばっかりだしな。推測ばかりじゃ記事にはできねえ」
「はは。ですよねぇ」
「で、この装置を調べてなんかわかったかい？」
「それもちょっと……。おそらく導力で動く装置だとは思うのですが……って、また推測ですね、すいません」
「いやまあ、謝ることはねえよ。学者さんだって、何もかも知ってるってわけじゃねえよな」
「ふーん。案外マジメに記事書いてるんだ」
エステルの言葉にナイアルが頷いた。
「うちはヨタは載せねえよ。やわらかい記事はゴシップまでだ」
「そのゴシップ記事でも、やわらかすぎて硬い先輩は苦手ですけれどねぇ。この顔で意外とホントに真面目なんですよぅ」

「うるせえよ！　さっさと撮れっての！」
「はぁい！」
　ドロシーがカメラを抱えて屋上の端まで走ってゆく。
　ぱちりぱちりと、ドロシーが写真を撮り始めた。正面の古代の装置だけでなく、塔から見える景色も熱心にカメラに収めてゆく。高い塔から見下ろすロレント地方の風景は森と畑が織りなす緑のまだら模様がほとんどを占める。森は黒に近い深い緑色で、畑は明るい若草色だ。南のほうに煉瓦でできたロレントの街が見えた。絶景だった。この眺めは観光名所にできそうなくらいだ。
　ドロシーにカメラを任せてナイアルのほうはさてどうするのかと思ったら、壁に寄りかかって煙草を吸いはじめた。見るべきものは見た、ということだろうか。
　アルバはまだ古代の装置に未練があるようで、腰を屈めてあちこちを触ったり撫でたりしている。
（ん？　ヨシュアは？）
　みなと離れて、ヨシュアは壁の端に肩をもたれかけさせて俯いていた。
　一見すると、休んでいるだけに見えるけれど……。
　エステルは駆け寄った。
「どうしたの？　なんか、元気なくない？」

「君はごまかせないな……」
「気分わるいの？」
「そんなところ。屋上に上がってからちょっと……」
　心配だったが、少し休めば大丈夫だからと言われてしまい……。エステルは仕方なく塔の屋上をあちこち見て回って時間をつぶした。古い遺跡の探索に同行することも多い遊撃士にとっては遺跡を見て見聞を広めるのも大切なことなのだ――ヨシュアからの受け売りだが。
　それでもひとりではあまり楽しくない。
　祭壇みたいな装置を飽きずに調べているアルバや、相変わらず景色に話しかけながらシャッターを切っているドロシーに比べると、エステルはすぐに飽きてしまった。
（やっぱり、身体を動かしてるほうが好きなんだよね……）
　しかたなくパイルロッドを構えて、演武なぞ始めてしまったり。
　ひとしきり棒を振り回していたら気分がすっきりした。
　我ながら単純だなとエステルは思ってしまう。
「おおい。暗くなる前に帰らねえか？」
　声に顔をあげると、ナイアルがエステルに向かって手招きをしていた。

†　†　†

ナイアルはアルバとなにやら話していたようだ。
「用事は済んだの？」
「おう。こっちの先生のほうも、もう充分だとさ。で、せっかくだからロレントまで一緒に帰らねえかって持ちかけてみた。ガキとはいえ、そこそこ役立つ護衛がいるからな」
「引っかかる言い方ねぇ」
「あまり世辞とか得意じゃねーんだ。で、どうなんだ？」
「どうって……うん。確かに暗くなると危ないし、そのほうが良いと思うけど」
「決まりだな。おおい、ドロシー！　そろそろ引き上げるぞ！」
はぁいと呑気な声が返ってくる。
（そうだ。ヨシュアは大丈夫かな？）
屋上の手すりに寄りかかっていたヨシュアのほうへと駆け寄る。
「どう？」
「もうだいぶいいよ。大丈夫」
注意して顔色を見たけれど、どうやらヨシュアの言葉に嘘はないようで、先ほどまでは少し白かった頬に、血の気が戻ってきていた。エステルはほっとしてしまう。
「よかった。じゃあ、そろそろ帰りたいみたいだから」
「聞こえてた。もう普通どおりに動けるよ」
エステルたちは《翡翠の塔》を出ることにした。
下りはあまり苦労することもなく、平穏無事だった。一行の人数が増えたからだろうか。魔獣たちに近寄られることもなかったのだ。
エステルたちは一度も戦うことなく塔を出た。
ロレントの街を目指して街道を歩く。
道々の話題は、ボースで起きているという強盗事件についてだった。ナイアルが次の取材にと決めている事件だそうだ。
王都に次ぐ大都市であるボース市を中心に荒らしまわる強盗団がいて、いまだに捕まっていない。
どうやら、逃げ足の速い乗り物——例えば飛行船だ——を使用しているらしい。
「ひょっとして、空賊ってヤツ？」
「その可能性が高いな。だが、エレボニア帝国による偽装工作というセンもありえる。やつらも飛行船をもってるからな」
「ええっ……そんな！」
北方の大国エレボニアとは確かに十年前の戦争で戦ったが、その後、平和条約を結んでいるのに。まさか、とエステルは思ったのだ。

「帝国内じゃ、平和条約に不満を持っているヤツだっているんだ、エレボニアのイヤガラセの可能性はありえる。ま、いまだ真相は闇のなかさ」
それを調べに行くのだとナイアルが言った。
このときまでは、エステルは考えてもみなかったのだ。すぐに、自分たち自身もボースを訪れることになろうとは……。
ロレントの街には、夕暮れが西の空にかすかにまだ残る時刻に着いた。
街の入り口でアルバとは別れ、遊撃士協会の支部の前で、ナイアルとドロシーとも別れることになった。
「なかなか役に立ってくれたよ。一応、礼を言っておこう」
ナイアルが言った。
「ふふん。遊撃士は頼りになるでしょ」
「何言ってやがる。まあ悪くなかった、ってとこだ。俺の知ってる遊撃士はもっと頼りになるぜ。てか、おまえたちはまだ『準』遊撃士なんだろ」
「うっ」
「まあ、そうだね。僕たちはまだまだこれからだよ」
「そ、そうよね。わかってる！　すぐに追いついて正遊撃士になってみせるわ！」
「その意気だね」

「エステルちゃん、応援してますよぅ」
ドロシーにも励まされてしまった。そんなエステルを見て、ナイアルが微苦笑を浮かべている。
記者コンビと別れてエステルたちは支部の扉をくぐった。
「あら、エステル、ヨシュア」
「あれ、シェラ姉?」
ちょうどシェラザードのほうも、任務を終えて戻ってきたところだった。ひさしぶりの再会を互いに喜び合う。
「仕事が終わったんだったら、ひさびさに呑みましょうか！」
「え～っ……酔っ払ったシェラ姉の相手すんの?」
「あんた、言うようになったわね……」
目を半眼にされて睨まれてしまった。
「エステル、先に報告を済ませちゃおうよ」
ヨシュアがちょうどいいタイミングで話を逸らしてくれる。
ちっ、とかシェラの舌打ちが聞こえた気がしたが気のせいだ。
任務の結果を受付のアイナへと報告していると、扉を激しく叩く音とともに、男がひとり、転がりこむようにして飛び込んでくる。

「た、大変じゃあ！」
大声でそう叫んだ人物を見て、エステルは目を丸くした。最近、見たばかり、けれどこんなところで見るとは思わない人物の顔だったからだ。
「市長さん？」
「どうしたんですか？」
よろけた市長をヨシュアが支えた。彼の腕をつかみながら顔をあげ、市長が叫ぶ。
「強盗じゃ！」
「は？」
「家に強盗が入ったんじゃ！　教会から先ほど帰ったら、家のなかの様子がおかしかった。荒らされていて、しかも家人が誰もおらんかったのじゃ」
「っ！　そんな……ミレーヌおばさんたちは⁉」
「ぶ、無事じゃった。屋根裏に全員閉じ込められておった」
エステルは安堵の息をついた。強盗とは穏やかではないが、話を聞くと、どうやら盗みの邪魔にならないよう、家人はすべて屋根裏に閉じ込められていたらしい。
黙って話を聞いていたシェラザードが口を開く。
「不幸中の幸いね……市長さん、現場を見せてもらえる？」
一気に話して息を切らしていたクラウス市長が、あえぐように「あ、ああ」と声を漏らしながら、顔を縦に振った。
現場を調べると言うシェラザードに、エステルとヨシュアも同行することになった。
何かできることがあるかもしれない。
そう思ったのだ。
結論から言えば、同行してよかったとエステルは思う。
あろうことか。市長邸から盗まれたのは、エステルとヨシュアが苦労して鉱山から運んできた——女王陛下に贈るはずだった七耀石の結晶だったのだ！

「結局、手がかりらしきものは、このセルべの葉っぱだけかあ」
床に落ちていた珍しい葉をエステルはくるくると摘まんで回してみる。セルべの木はロレントの街なかには生えていないから、おそらく押し入った強盗団の誰かが森からひっつけてきたものだろうと思われた。
ささやかな、手がかりともいえない手がかり……。
「それにしても、不思議よね」
ひととおり調べた結果わかったのは——。
大きな市長邸のなか。強盗たちが狙ったのは、市長の私室にあたる書斎だけだった。
他の部屋はほとんど荒らされていない。
盗まれたものも多くはない。食料をいくらか。あとは金庫のなかの七耀石。
その七耀石が、もっとも貴重で高価なものだったわけだが。
「まるで、最初からその結晶だけを狙ったみたいねぇ」
シェラザードが言った。

「でも、シェラ姉。それは無理じゃない？　だって、あたしたちが七耀石を市長さんに渡したのって一昨日だよ」
金庫を漁るのはわかるとして、そこに結晶があるかないかなんてあらかじめわかっていたはずがない。
「二日前か。市長さん。ここ二、三日の間で、誰か、この部屋に通した？」
「むむ。そうじゃな。リベール通信の若いのが二人来たな」
「ナイアルさんたちのことかな。あのひとたちも市長さんに会いに来てたんだ」
ヨシュアが首を振った。
「でも彼らは犯人じゃない。事件が起こったとき僕たちといっしょに《翡翠の塔》にいたんだから。容疑者から除外していいと思います」
「まあ、ナイアルさんたちは強盗には見えないよね」
あのドロシーが凄腕の女盗賊だったりしたらびっくりだ。
「それ以外というと……ううむ。家内や使用人たちは書斎によく出入りするがのう。他には、そう、ジョゼット君くらいしかおらんぞ」
「ジョゼット？」
シェラザードが聞き咎める。そういえば、市長に七耀石を届けたとき一緒にいたのはヨシュアだけだ。シェラザードは彼女を知らない。

「王立学園の生徒だけど……取材に来てたんだって」
「市長に？」
「うん。でも、それだけだよ。容疑者には無理があるよね。名門学校のお嬢様だもの」
「本当に本当の王立学園の生徒だったの？」
シェラザードが言った。
「ほえ？　だって、制服着てたよ」
「制服なんて、その気になればそっくりなものを作れるわ」
「で、でも、女の子だし。まさかそんな強盗とかありえないし」
「はあ。エステルってば。あなた自分だって女の子だっていう自覚ある？　強盗の一味にあなたくらいの若い女の子がいたって不思議はないわ」
「えええ⁉　シェ、シェラ姉ってば本気で言ってる？　ありえないから。人当たりが良くって、本当にいい子だったもの。ね、ヨシュア？」
振り返ったエステルの目に、難しい顔をしたヨシュアが映る。
「ヨシュア？」
「悪いけど、僕の意見は逆だよ」
「へっ……」
「あの子……市長さんが七耀石を金庫に入れたとき、食い入るように見つめていた。錠を開ける指の動きひとつ見逃すまいとしてたね。少なくとも名門の女学生の目つきには見えなかった」
「そ、そんな……」
エステルには世界がぐらりと傾いた気がしてしまった。本当に良い子にしか見えなかったのだ。てっきりヨシュアも同じように感じていたと思ったのに。
ヨシュアの態度を思い返してエステルは愕然としてしまう。
（あのときから——ヨシュアは怪しいと思ってたんだ）
「信じられんのう」
「どちらにせよ、その女の子には話を聞いてみる必要がありそうね」
シェラザードの言葉に、エステルの頭にちかりと何かが瞬いた。
（あれ？　ええと、何かひっかかったんだ、けど……）
考えこんで、はたと思い出す。
「いっけない。あの子、今日、ロレントを発（た）つって言ってたんだ！」
「……急ぐ必要がありそうね。どこに泊っているか聞いてる？」
「《ホテル＝ロレント》って……」
「行くわよ！」
エステルたちは市長邸を飛び出した。
既に時刻は夕方になっていて、空は薄墨色に変わっていた。

走って走ってホテルまで駆けつける。
だが――。
「先ほど、チェックアウトなされました」
カウンターで受付をしているヴィーノさんが無情に言った。
飛行場にも行ってみたものの、王立学園の制服を着た子は見ていないと知らされて――手がかりを失った。
「街道沿いを来たのね……」
「だとすると、一気に捜索範囲が広がってしまいますね。考えてみれば、仲間がいるのですから、それなりの広さの潜伏場所が必要か……」
市長邸の屋根裏に閉じ込められていた人たちも、強盗団は数名の屈強な男たちだったと証言した。
それなりの数の強盗たちが隠れていられる場所ということになる。
とはいえ、それだけでは居場所を特定できはしない。手がかりらしきものも……。と、そこでエステルはようやく思い出した。
ポケットから一枚の葉っぱを取りだす。
「そういえば、コレ……」
役に立たないだろうと思っていたから、すっかり忘れていた。今や手がかりはこの葉っぱだけだ。
「そうか……それがあったね。シェラさん、ロレントの街の近くにセルベの木が生えている場所を知りませんか？　たぶん、強盗団はそこに隠れています」
シェラザードが腕を組み、しばし目を閉じる。
「セルベの木か……。もちろん、一本、二本生えてるくらいじゃダメよね。たまたまくっついてきた葉がセルベっていうことは、きっと森になっているところに違いないわ」
たまたま生えていた一本のセルベの木から落ちた葉がくっついてきた、という可能性もあるわけだが……確率の高いほうから考えるべきだろう。
「たしか、ロレントの南にあるミストヴァルトに固まって生えていたわね……」
「南の森か」
「行ってみるしかないよね！」
方針は決まった。
頼りない手がかりだが、このまま何もせずにいるよりはいい。
空はすでに暗くなっていて、時刻は夜遅くなっていたけれど、一刻を争うからと、そのまま街を出た。
南へ――ミストヴァルトの森へ。

獣の遠吠えが聞こえる。
街道をはずれ、森へと辿りついたときには日が変わっていた。
手に持つ導力灯の明かりだけを頼りに、エステルたちは歩み続ける。
湿った落ち葉や下草を踏む音がやけに響いた。かさり、と音を立てるたびに、森の魔獣たちを刺激してしまわないかと心配になる。
「これは……当たりかもね」
シェラザードがぽつりと言った。
「足跡のことですね？」とヨシュアが同意する。
「ええ。ほら、地面のあちこちに人間の踏んだ跡が残ってる。どうやら森は雨が降ったばかりみたいね。おかげで後を追いやすいわ」
導力灯を左右に振りながらシェラザードが言った。
なるほど、とエステルも納得する。緑の匂いが濃いのは雨上がりだからか。
足跡はそこここに残っていた。やわらかな土の上、明らかに靴底の模様だとわかる跡がついていた。人間がここを通ったのだ。
「で、でも、猟師とかかも」

†

†

†

「違う、と思う。魔獣の行き交う森だからね。このあたりの猟師たちなら、必ず猟犬を連れているものだよ。彼らのほうが嗅覚が鋭いからさ。僕たちと違って、彼らは魔獣に近寄られる前に逃げなきゃならないから」
だから、魔獣の臭いを嗅ぎつけやすい犬たちを連れて歩くわけだ。
「でも、そういう足跡は見当たらない」
ヨシュアの解説にエステルは唸ってしまう。暗闇のなか、かすかな光だけを頼りにして見て取った光景から、そこまで考えていたとは。
同時に、自分の観察力の無さに落ち込んだ。
（っと、いけない！　落ち込んだって成長しないもんね。次よ、次！）
切り替えの早いのがエステルのいいところだ。
「ねえ、ヨシュア」
声を大きくしすぎないように注意しながらエステルは問いかける。
「なに？」
「どうして、最初からあの子を疑ってたの？」
聞きたかったことを聞いてみる。
「どうしてって……」
「市長さんの家でさ。気になるって言ってたのは、別にタイプだったとかじゃなくて、名門校

のお嬢さまらしくないってことだったんでしょ?」
　エステルも、今ならわかる。
「最初からタイプとか言ってなかったけどね」
　エステルは闇のなかで顔を赤らめた。
　勘違いしたのは確かにエステルのほうだ。
「わ、悪かったってば。だって、あたしはそう思ったんだもん。ほら、すっごく可愛い子だったし」
「そう?」
「えっ。可愛かったよね?」
「別に……」
「へ……? 信じられない! ヨシュアってば、ちゃんと見てた?」
「見てたから――」
　そこで足を止めて、ヨシュアがエステルの顔を覗き込んできたのだ。
「――騙されなかったんだと思うけど?」
「うっ」
「わかってる?」
「わ、わかってる、けど」

　ふうとため息をついてヨシュアは歩きを再開する。その後ろについて歩きながらエステルはちょっとしたパニックになっていた。なんでため息をつかれたのかさっぱりわからない。
　これは――よっぽどダメで、呆れられたっていうことだろうか?
「いいけどさ。そうだな……しいていえば、うまくやりすぎていたから、かな」
　ヨシュアが言った。
「うまく……?」
「そう。名門学園のお嬢様らしすぎた」
「へ? それじゃだめなの?」
　生徒に化けていたのだとして。それが完璧すぎたとはどういうことだろう。完璧にジェニス王立学園の生徒になりきっていたのなら、成功なのでは?
　エステルは首を傾げてしまった。
「君がさっき自分で言ったんだけど……」
「あたしが?」
「そう。『女の子だし。まさかそんな強盗とかありえない』って言っただろ?」
　エステルの口調をマネして言った。
　ちょっと似ていたのが微妙に悔しい。
「つまり、君のなかでは強盗は粗野な大人の男のイメージだった」

「ああ、うん」
「でもジョゼットは強盗団の一味だ。たぶんね」
そう言って、これでわかっただろ、という顔をする。もちろんエステルにはさっぱりわからない。素直に一発で教えてくれればいいのに。
「そりゃまあ、強盗にも色々いるんでしょ」
何気なく言ったつもりだったが、ヨシュアが大きく頷いた。
「そう。同じことは『名門校のお嬢様』にも言える」
「……？　どーいうこと？」
「エステル、君の頭のなかにあるのは、名門校のお嬢様の典型なんだ。多くの人に頷いてもらえると君が思っているイメージ。でもね……ほんとうに完璧に典型そのままな人間なんていないのさ。たとえ彼女がほんとうの貴族だったとしてもだ」
「いない……？」
「いないよ。断言できる。もしいたとしたらそれは——演技だ」
きっぱりと言った。
そして、そのまま口を閉じる。
ちょっとだけ険しい顔になった。言わなくていいことまで言ってしまった。そんな顔をしていた。長い付き合いのエステルにはわかる。

「ごめん」
「なんで謝るのさ」
「なんとなく」
そう言ってから、しばらくエステルも口を閉じていることにした。余計なことを言いたくないときは黙っていよう。代わりにエステルはヨシュアの背中を二度、パンパンと叩いた。ニカッと笑ってみせる。
ヨシュアがほっとした顔をする。
（うん——これで元通りだね）
エステルもほっとした。
その瞬間に、ぱっと導力灯の明かりが消えた。

†　†　†

叫び声をあげなかったのは、誉めてもらってもいいと思う。
とっさにエステルは口を手で塞いで悲鳴を止めた。
導力灯の明かりを切ったのはシェラザードだったのだ。同時に、止まれの合図。
短い制止の声に、エステルはぎくりと身をすくませた。

（な、なに⁉）
声だ。
木立の向こうからかすかに聞こえてくる。
「ふっふっふ……まったくチョロイもんだよね」
聞き覚えのある、少女の声だった。
だが、エステルの記憶のなかにあるものとは、しゃべり方が著しくちがう。親しい相手に語りかけているようだが、それにしても粗野で乱暴で……。
シェラザードがゆっくりと声のほうに向かって動き始めた。腰をかがめ、身体を低くして、藪から身体を出さないよう気をつけながら進む。それなのに、足音どころか葉擦れの音さえ立てないのだからさすがだ。
エステルとヨシュアも続いた。
少し先で木立が切れている。どうやら開けた空き地になっているようだ。太い幹のうしろに隠れながら、エステルたちはそうっと様子をうかがう。
大きな身体の男が二人と、制服姿の少女がひとりいた。
白のスカートと紺のハイソックス。
ジェニス王立学園の制服だ。
ひらひらしたスカートを指で摘みあげながら少女が笑みを浮かべる。

「ははは。この格好をしてりゃ、大抵のヤツは騙せるから助かるよ」
ジョゼットだった。
「あの、お人好しの市長といい、能天気な女遊撃士といい……。おめでたいヤツら！」
一瞬で、全身の血が沸騰した。思わず飛び出そうとするエステルの腕を引いたのは、いつも冷静沈着なヨシュアだった。
「落ちついて……もうちょっと話を聞いてみよう」
「むう……仕方ないわね」
ヨシュアが言うならとエステルは怒りを抑える。乗り出しかけた身体をなんとか引っ込めた。だが、強盗団の一味の話を聞いているうちにエステルはどんどん自分の血が熱くなっていくのを感じてしまう。
彼らは鉱山で巨大な七耀石の結晶が発掘されたことを知っていた。市長よりも先に手に入れようと鉱山に忍び込んでいた。ところが、エステルとヨシュアが思ったよりも早く受け取りにやってきたために、その計画は頓挫してしまったのだ。
そこで彼らの仲間はジョゼットへと指令を送り、変装したジョゼットはエステルたちの先回りをして市長邸で待っていた。そうとは知らずにエステルたちは、七耀石を素直に届けにいってしまい……。結晶の在り処も鍵の番号も彼らに教えてしまうことになった。
「アレは？」

「ここにありますぜ、お嬢」
ジョゼットに問われて、男の片方が、ふところから七耀石を取りだした。緑色に光っている。
間違いない。エステルたちが市長の元へと届けた結晶だ。
「よしよし。あとはキール兄の来るのを待って……」
ジョゼットが結晶をためつすがめつしてから男へと返した。
にんまりと微笑む。
（くっそ〜〜〜っ）
まんまと騙された。
最初から最後まで彼女は嘘をついていたのだ。
「にしても、あんな連中が遊撃士とは、まったく笑わせてくれるよね。特に、あのノーテンキ女！　ボクのことを毛ほども疑わずに、『仲良くなれそう』だってさ！」
顔を見合わせて強盗たちは声をあげて笑った。
我慢もそこまでだった。
「……何がおかしいのよ」
地獄の底から聞こえてくるかのような低い声が出た。
そのままゆっくりと彼らの前に姿を見せる。
三人ともが、エステルのほうへといっせいに振り返った。

「お、お前たちは……」
「黙って聞いてりゃ、好きに言ってくれちゃって。……覚悟はできてるんでしょうね？」
「どうして……ここに」
男の片方がつっかえつつも声を出した。
ジョゼットのほうも驚きが顔に現れている。
「七耀石を盗み出すまでの手際はよかったけれどね。詰めが甘かったみたいね？」
エステルの脇に並んだシェラザードが艶然と微笑みつつ言った。
「遊撃士協会規約に基づき、あなたたちの身柄を拘束します。抵抗しない方が身のためですよ？」
ヨシュアが協会の手続きに従って宣言した。
「逃がさないわよ……」
「ビ、ビビることはないよ！　いくら遊撃士とはいえ、しょせんは女と子どもじゃないか！」
「何言ってんのよ。あんたのほーが、どう見てもあたしより年下じゃないの。よく見れば、その制服、ぶかぶかじゃない！」
「う、うっさい！　ボクたち《カプア一家》の力を、骨の髄まで思い知らせてやる！」
「こっちの台詞よ！　遊撃士を甘くみないでよね！」
パイルロッドを背中の留め金から外して構えた。
自分の能天気を責められるのはともかく、遊撃士を馬鹿にしたのは許せない。エステルは構

えたパイルロッドを振りかぶって、突撃しようとした。
「エステル！」
悲鳴のようなヨシュアの声がエステルの耳朶（じだ）を打った。

† † †

間一髪だ。
前へと踏み込んだ力を、エステルは無理やり急停止へと変える。やわらかい雨上がりの森の大地を削って、エステルは辛うじて踏みとどまり――次の瞬間。
目の前が爆発した。
何かが、エステルとジョゼットたちの間の大地に撃ちこまれたのだ。土砂が王冠のように吹き上がり、もうもうと煙があがる。エステルは顔の全面に熱を感じた。
心臓がうるさいくらいに鳴っていた。ぞっとしてしまう。
目の前の大地には直径が二アージュにもなるすり鉢状の大穴が開いていた。
危ういところ。もうちょっとでエステルはあそこにいるところだったのだ。
「導力砲（オーバルカノン）⁉」
シェラザードの叫びがエステルの耳に届く。

導力を使って撃つ大砲のことか。弓とか短銃なんて目じゃない距離まで届くっていう。
もちろん威力も計り知れない。
（ということは、撃ってきたのは……）
「エステル、上だ！」
立ち込める煙のなか。どこからかヨシュアの声。
夜空から爆音が降ってきた。導力機関の音だ。
頭上をふり仰ぐ。
風に煙がさらわれてゆく。
月の無い夜だった。黒々とした空に向かって、シェラザードが導力灯を向ける。
「飛行艇⁉」
夜空を切り裂く光の円錐のなかに、空飛ぶ巨大な船の姿が浮かびあがった。
まるっこい舳先の下部。左右に取り付けられた導力砲（どうりょくほう）が見えた。砲身の先端にチカチカと赤い火が点り、轟雷にも似た響きが鼓膜を打つ。
三発、四発と、立て続けに、エステルの目の前に砲撃が撃ちこまれた。
地面が揺れて倒れそうになる。
「あはは、形勢逆転だねっ！」
立ち込める煙の向こうで高笑いが聞こえた。ジョゼットの声だ。

空から降りてきた飛行艇が、彼女の背後へと着陸する。
「ジョゼット、大丈夫か⁉」
「キール兄！　遅いよ！」
飛行艇の扉の開く音。煙の向こうでジョゼットたちが遠ざかる気配がしている。
「ま、待ちなさいよ、こらぁ！」
大声で叫んだが、間に合わないことはわかっていた。導力機関の音が、空気を切り裂いて、泣き女（バンシー）の金切声のように響く。
飛行艇の撒き散らす風に木々の枝が揺らされて鳴る。
空から声が降ってきた。
「勝負はおあずけだ！　これで勝ったと思わないでよ！」
ジョゼットの声だった。
「いずれ決着をつけてやるからね！」
飛行艇の駆動音とともに、その声も徐々に遠くなってゆき、空の彼方へと消えていく。
手にした導力灯の光ではもう届かない。飛行艇の音は梢の向こうの空に消えて、やがて聞こえなくなってしまった。
代わりに虫たちの鳴き交わす声が戻ってくる。
「参ったわね……。あんなモノまで出してくるとは」

シェラが呆れたような声で言い、あははと力なく笑った。
「完敗かぁ。悔しいなぁ」
エステルも唇を噛みしめる。
「そうでもないさ」
ヨシュアが言った。
「へ？」
「これは取り返せたからね」
言いながら、ヨシュアが手のひらを見せてくる。その上に乗っていたのは……。
「七耀石！　どうして⁉」
「最初の砲撃のときだよ。あの一撃は彼らにとっても予想外だったみたいだね。うっかり落としたところを、僕のほうが先に手に入れたというわけ」
「いつのまに……」
「僕のほうが君よりはこういうコトには向いているからね……」
皮肉げな表情を浮かべてヨシュアが言った。
良いことをしたのに辛そうな顔になるのは何故なんだろう、とエステルは思う。初めて会った夜から、エステルは時々ヨシュアのこういう顔を見る。そのたびになんだか腹が立つのだ。
ヨシュアに対してではない。ヨシュアにこんな表情を浮かべさせている何かにだ。

そして、そのたびに、エステルはいつも同じことをしている。今回もだ。ヨシュアの背中を思い切り叩いて言ってやった。
「ヨシュア、えらい！」
「っ、痛いよ、エステル」
「とにかく、これで一勝一敗の引き分けってことね！」
「強引だね……」
「いいの！　そして、次は負けないわよ！　あの生意気ボクっ子は今度会ったら、ギタギタのパーにしてやるんだから！」
「ギタギタのパーって……古い言い回しを。君いったい、いつの生まれさ」
そこでようやくヨシュアは笑みを浮かべたのだ。ヨシュアが笑ってくれると、エステルも嬉しかった。
それは昔も今も変わらない。
「にしても……。シェラ姉、もしかして、あいつらが空賊ってやつ？」
「可能性はあるわね。まあ、七耀石を取り戻せたことで、今回はよしとしましょうか」
シェラザードが言った。
既に夜も遅い時刻だ。ひょっとしたら、夜明けのほうが近いくらい。
幸いにも森の開けたその場所には、空賊団が根城にしていた簡易の野営施設がそのまま捨てであった。布を張っただけの粗末なテントに過ぎなかったが。
三人は交互に仮眠を取った。疲労も限界にきていたから。
そうして夜が明けてから、エステルたちはロレントの街に戻ったのだ。
取り返した結晶を市長の元に返すと、「よくやってくれた」と満面の笑みで礼を言われた。依頼を成功させていちばん嬉しいのは、こうして、依頼人からささやかなお礼を言われるときだ。
その足で遊撃士協会の支部に結果を報告した。
受付のアイナが経緯を知って同情してくれる。
「大変だったわね。まさか噂の空賊団が現れるなんて」
「ボースの話だと思ってたから、油断したわ。考えてみれば飛行艇を持っているのだもの。ロレントだって庭みたいなものよね。まだまだ先生の域には遠いわね……」
シェラザードが悔しそうに言った。先生というのは、エステルの父カシウスのことだ。
そんな立派な尊称で呼ばれると、エステルにはいまだにピンとこないのだが。
（シェラ姉の父さんに対する評価って、妙に高いのよね）
でも、とエステルは思い返した。
確かに《翡翠の塔》の時のように、父がいたら、今回の結果も違っていたかもしれないとも思う。空賊たちも逃がさないで捕まえられたのかもしれない。そう考えると、エステルたちは

遊撃士としてまだまだだと――。
「だからさ。アイナ。そろそろ推薦してもいいんじゃない？」
「そうね、私もそう思います」
「ん？」
エステルは意識を会話に戻した。なにやら、シェラザードとアイナがエステルとヨシュアを交互に見ながら、にやにやしている。
「なになに？　何の話？」
「良い話よ。二人とも、これを受け取ってちょうだい」
そう言いながら、カウンターに置いてあった封筒から一枚の紙を抜き取った。
受け取って、読んで驚いてしまう。
推薦状だった。

正遊撃士の資格ありと認める。ロレント支部。

そう書いてある。
「こ、これって……」
「今のあなたたちは《準遊撃士》。つまり見習いみたいなものね。《正遊撃士》になるためには、王国にある全ての地方支部で、こういう推薦を受ける必要があるの。これはロレント支部の推薦状よ」
瞬間、息が詰まった。
（これが……正遊撃士になるための推薦状……）
まじまじと書類を見つめてしまう。
「い、いいの……？」
「確か、見習いから昇格するにはそれなりの実績が必要と聞きましたけど……」
「あなたたちの今までの活躍からすれば充分だと思うわ。ただし、あくまでロレント地方での実績ってことだけどね。遊撃士たるもの、リベール王国内のすべての支部から認められなくちゃいけないの」
アイナが言った。
「すべての支部から……」
「そういうこと」シェラザードが言葉を添える。「ボース、ルーアン、ツァイス、そして王都グランセル。王国中から認められることで、正遊撃士は国内でのあらゆる便宜が図られるようになるわけ」
「まだ先は長いわ」
アイナがそう言って締めくくった。

「でもでも、すっごく嬉しい！」
　エステルは推薦状を胸に抱きしめながらヨシュアのほうへと振り返る。
「ねえ、こうなったら他の地方にも行くしかないよね！」
「はは。君なら言うと思った。僕は賛成だけど。父さんが何て言うかだね。帰ってきたら相談してみよう」
「うん！」
　元気よくエステルが頷いたときに――ベルが鳴った。
　支部の通信器に着信が入ったことを知らせる音だ。
　エステルたちに待っていてと目で合図してから、アイナはくるりと壁に向かって振り返り、導力通信器のフックを上げる。受話器を耳に押しつけてどこかの誰かとやりとりを始めた。
「こちら遊撃士協会。リベール王国、ロレント支部です。はい。あら、ご無沙汰を――」
　笑顔で応対していたアイナの表情が曇った。切迫したような顔つきになる。
　雰囲気の変化にエステルは気づいた。
「えっ！　それは……本当ですか？　はい……確かに大事件ですね」
　受話器を握っている手が白くなり、力が入っているのがわかった。いつも冷静で笑顔を絶やさないアイナの口許がへの字に閉じていた。唇を噛みしめている。
「え？　はい。ロレントにはおりませんが……。なんですって⁉　それは……確かなのですか？」

　切れ切れに相手へと返すアイナの声が事の重要さを伝えてくる。こんなアイナをエステルは見たことがなかった。
「……わかりました。はい。伝えます……。何かありましたら、すぐにお願いします」
　受話器をフックに下げて、アイナが振り返った。
「アイナさん、何かあったの？」
　一瞬、言うか言うまいかためらいがあった。アイナの表情は目まぐるしく目の前で変わり、ついに決意したのか口を開いた。
「ボースを旅立った定期飛行船の一隻が行方不明になったそうなの」
「ええっ⁉」
「行方不明……どこにも到着しなかったということですか？」
　アイナが頷いた。
　定期飛行船ということは、定時に離陸して定時に着陸する飛行船ということだ。そのスケジュールは滅多なことで狂わないと言われている。ところがボースを発った一隻の飛行船が着陸時刻になっても姿を見せなかった。
　最悪、墜落の可能性もある。
　ボースでは王国軍まで出動して、大規模な捜索が始まり、そのあおりをくらって、他の定期船もすべて運行を停止している状態だという。

つまり、いまリベール王国の空の便はすべてマヒしている状態なわけだ。
なるほど冷静なアイナが驚くわけだ。
「そ、それでね……」
「アイナさん?」
何か様子がおかしい。飛行船の行方不明は確かに大事件だが、それでどうしてここまでアイナが言いよどむ必要があるのだろう。エステルはふと嫌な予感を感じて——。
「そのね、ボースを離陸した飛行船の乗客名簿のなかに……、カシウスという名前があったそうなの」
「カシ——って、父さん!? まさか!」
「カシウス・ブライト、四十五歳。遊撃士協会所属、正遊撃士って……」
間違いなく父の名だった。
冷たい氷を当てられたように全身が固まって。
エステルは目の前が真っ暗になった。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.109

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/